

## 当院糖尿病センターでの診療経過中に発見された悪性新生物症例

永迫 久裕<sup>1),2)</sup> 堤 陽子<sup>2)</sup> 田中 順子<sup>2)</sup>  
丸山俊一郎<sup>2)</sup> 林 聡子<sup>3)</sup> 小野 順子<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup> 福岡大学病院 内分泌・糖尿病内科

<sup>2)</sup> 医療法人財団 華林会 村上華林堂病院 糖尿病センター

<sup>3)</sup> 医療法人財団 華林会 村上華林堂病院 薬剤科

要旨：我が国の死亡原因の第一位は悪性新生物であり、これは2型糖尿病患者においても同様である。2010年4月から2012年3月までに当院糖尿病センター外来に通院した375名のうち、悪性新生物の診断に至った11名（男性8名、全例60歳以上）について、背景、原発巣、転移や浸潤の有無、転帰などにつき調査した。原発巣は膵臓4名、大腸3名、胃、肝、乳房、悪性リンパ腫が各1名で、5名が発見後1年未満で死亡したが、残る6名は3年を経過しても明らかな再発なく経過していた。糖尿病については2型糖尿病が10名、罹病歴は10年以上が9名と長かった。診断の契機は自覚症状によるものが6名であり、うち臓器を推定できる症状を呈したのは4名であった。残る5名は血液検査や定期的画像検査での異常が診断の契機となった。発見時の治療はインスリン（経口糖尿病薬併用を含む）5名で、これらの血糖コントロールは平時でも不良で、直近の悪化はなかった。残り6名は複数の経口糖尿病薬を服薬していたが、うち3名がヘモグロビンA1c (HbA1c) の悪化が精査の契機となった。当院糖尿病患者の悪性新生物罹患率は2年間で3.79%と高率であった。

キーワード：糖尿病、悪性新生物、ヘモグロビンA1c、癌死